

英語劇のためのヒント：シナリオ作成と舞台作り（1）

Tips for Making of an English Drama: Scenario and Staging

(2007年3月31日受理)

佐生 武彦 橋内 幸子 垣見 益子
Takehiko Saiki Sachiko Hashiuchi Masuko Kakehi

Key words : 英語劇, オリジナル・スクリプト, ピーチ・ピッツ

要 旨

本学の英語コミュニケーション学科に、平成20年度から「英語パフォーマンス・コース」が開設される。コースの指定科目には、一連の英語ドラマの授業が配置され、演劇を通して、学生の英語力、表現力、コミュニケーション能力の養成を目指すことになる。前稿（2006）で考察したように、学科所属の英語劇団The Peach Pitsの団員は、1）発音とイントネーションの向上、2）人前で話をする自信、3）英語の語彙の増加という3つの点で英語劇の効果を体験している¹⁾。このような演劇による学習効果を益々高めるためにも、スタッフがスクリプトの作成や舞台作りの工夫等に注目する必要がある。本稿は、そのような試みの一つであり、また本学科独自の英語劇論の構築に向けて踏み出す第一歩でもある。

はじめに

前稿（2006）で、学科の英語劇団The Peach Pits（以下、「ピッツ」）の活動を紹介しながら、ドラマの授業を担当する教員やクラブの顧問によるオリジナル・スクリプトの有用性に言及した。本稿では、その後に書き上げて、実際に昨年12月の舞台用に使用した最新のオリジナル・スクリプトを参照しながら、今後のスクリプト作成と舞台作りに際して、参考になるとと思われる工夫や情報を次の3つの視点を中心に述べてみたい。1）原作とオリジナルティの関係、2）ナレータの上手な使い方、及び3）舞台作りの工夫。

1-1 なぜ「日本の昔話」なのか

ピッツが日本の昔話を題材に取り上げる理由として、前稿で『借り物』や『物真似』でない土着の文化遺産

を異文化に発信するため」という趣旨のこと述べた。今もこの姿勢に変わりはない。ただし、前稿の執筆時に抱くことのなかったある懸念によって、益々、昔話やお伽噺を演題に採用することの重要性を感じるようになっていく。

あるブログの管理人が、著名なスペインの画家、サルバドール・ダリが生前に10点の日本の民話の版画を作り、その中の作品の一つが「枯れ木に花を咲かせ」ている花咲じいさんを描いているとの刺激的な情報を披露しながら、「日本人ならほぼ100%の人が知っている花咲じいさん」と記していた²⁾。ダリの話に気を取られて見逃しそうになったが、「ほぼ100%」というのは極度の楽観論である。昔話やお伽噺のような伝統的な文化遺産は、確実にその継承の流れを断ち切れつつあるようだ。悲観的にならざるを得ない現状の一端を記すとピッツの団員10名のうちで「花咲じいさん」のストーリーを最後まで知る者は半数に満たなかった。劇団のレパトリーである

「サルカニ合戦」についても同様の数模様のようなだ。メディアが軽薄でどうでも良いような情報をまき散らすこの時代、昔話などに隠されている先人の知恵を学び、活かす方法を考えなければならないと思う³⁾。日本の昔話を英語を媒介にして再学習というのも情けない話ではあるが、こういう機会があるだけでも幸いと思うべきであろう。

1-2 なぜ「花咲じいさん」なのか

今回の題材に「花咲じいさん」を取り上げることにしたのは、劇団の事情によるところが大きかった。本来であれば、06年12月の舞台は、2年生5名、1年生5名の総勢10名で「浦島太郎 (The Tale of Urashima Taro: Taro Goes Down Under)」に取り組む予定であったが、以下の2つの理由で変更の必要が生じた。一つ目の理由は単純で、05年7月に2年生の1人がすでに「亀」の役で演題を経験済みであったこと。

もう一つはやや複雑で、劇団内のセニョリティーと配役の関係に纏わる問題があった。つまり、セリフの多い重責の配役は優先的に先輩である2年生に回り、後輩の1年生は所謂「ちょい役」に留まるという暗黙の了解事項である。2年生にとって「最後の舞台」ともなれば、出来るだけ重要な配役に就かせたいと思うのが人情であろう。しかし、入団後の最初の舞台(06年7月)を経験し、演じることの面白さと楽しさを知った燃える1年生を「ちょい役」で満足させるのは、教育上よろしくないのも事実であった。そこで書き上げたのが、本稿で扱う「花咲じいさん (An Old Man And The Cherry Blossom)」である。すでに2度または3度の舞台を経験した2年生が、短大在学中の最終舞台用として使用する、幾分かアドバンスなスクリプトとして完成させたものである。

前稿で述べたオリジナル・スクリプトの利点が、今回の執筆でも実証されたと思われる。つまり、当時(06年9月)の2年生ピッツの実情に合わせて、登場人物の人数が考慮された上で演題が選ばれ、さらに、メンバーの舞台経験に応じて各配役のセリフ数及びその難度など考慮しながら、執筆を進めることが出来たからである。犬のポチ(今回は1年生が担当)を除けば、最後の舞台を飾るに相応しい、「ちょい役」のないスクリプトとなっ

ている。(各配役の台詞の数等については、表1を参照のこと)

2-1 原作とオリジナリティーの関係

原作に忠実なストーリー展開やスクリプトは、小学生の学芸会でもない限り、退屈なものに違いない。ピッツの英語劇では、原作を大筋で押さえながら、必要に応じて追加、省略、アレンジ等を施すことを、むしろ奨励・実践している。日本の昔話を英語で演じる劇団や脚本家のオリジナリティーは、この逸脱する部分にしか存在し得ないと思うからである。また、「日本の昔話」の原作中に用いられているセリフの中に「笑える」ものを探し出すのは、無理ではないとしても、かなり困難なことであろう。前稿で述べたように、登場人物に「笑えるセリフ」を喋らせて、ジョークの楽しさを原作に追加することも、オリジナル・スクリプトの醍醐味である。以下で、ピッツ版「花咲じいさん」にあるオリジナルの部分をつか取り上げてみる。

2-2 事例 その一 (解説&スクリプト)

原作では、多くの場合、ポチが最初に登場する。「桃太郎」の桃のように、川上から木箱に乗って流れて来る場合、「浦島太郎」の亀のように悪ガキ達に虐待されている場合など地域によってかなりのバリエーションがあるようだが、いづれにせよポチの登場でストーリーが始まる。窮地にあったポチを助けるじいさんに対する「報恩」が重要なテーマの一つであれば、上のような諸説に見られる形でのポチの登場は不可欠であろう。

ピッツ版「花咲じいさん」では、「報恩」或いは「善良な人間が神の恵みを得る」⁴⁾ということよりも「強欲は身を滅ぼす」という教訓を中心的なテーマに掲げた。2006年がライブドア事件に象徴されるような「身を滅ぼした強欲者」が跋扈した一年であったからである。この為、開幕後のナレータ登場に続いて、本題に入る前のプロローグとして、「Good Guy爺さん&婆さん」(以下、「爺さん&婆さん」と「Bad Guy爺さん&婆さん」(以下、「爺&婆」)の違いを明確にするために、上記二つのカップルを紹介する1幕を挿入した。紹介はナレータによるイ

インタビューといういささか意表を突く方法で行われている。通常、ナレータが劇中の登場人物と会話することは希なことと思われるが、ピッツの英語劇では、許容範囲内でこの方法を採用し、ストーリーの展開に活用している。このこととの関連事項は次章の「ナレータの使い方」で、少し触れるつもりである。

以下は、見知らぬよそ者であるナレータを暖かく迎え入れる爺さん&婆さんとのやりとり。続いて、訪ねてきたナレーターを邪慳に扱う婆とインタビューの報酬に金銭を求める爺とのやりとりの様子である。

Narrator: In order for you, the audience, to have a better picture of the differences between the two couples, I'm gonna give them quick interviews right here. OK, let's start off with the right house couple.

【観客の皆さんが、2つのカップルの違いについてより鮮明が像が描けますように、ここで即席のインタビューをしてみたいと思います。まずは、右の家のカップルから。】

Narrator: Hello, I'm sorry to bother you, but could you spare some of your time? I'd like to ask you folks some questions about yourselves.

【お邪魔してすみません。少し時間を頂けますか。あなた方について幾つかお尋ねしたいのですが。】

Bar-san: Well, I've never seen you before. You're not from this village, are you?

【あら、見かけないお方だね。この村の方じゃないですね。】

Narrator: Oh, I'm sorry. I'm the narrator of this story, and of course I do not live in this village. I live in Fukuyama.

【どうも、すみません。私はこの物語のナレータで、もちろんこの村には住んでおりません。福山在住です。】

Bar-san: Well, you look different. Actually, you look very nice. Oh, sorry for my staring at you like this. Please have a seat. I will make some tea for you.

【何だか容姿が違いますね。というか素敵だわ。あら、ごめんなさい。ジロジロ見たりして。どうぞお掛けくだ

さい。お茶でも入れますわ。】

Gee-san: Well, honey, sounds like we have a guest today. Hello, young lady.

【おや、お客さんかい。いらっしゃい、お嬢さん。】

Narrator: Hi. Nice to meet you. You're the Hana-saka Gee-san! I've heard a lot about you from my mother when I was a little girl. My mother told me the story about you so many times that I became sick and tired of hearing it.

【こんにちは。初めまして。あなたが花咲じいさんですね。子供の頃に母からいろいろお伺いしました。母があなたの物語を何度も話すものですから、うんざりしちゃったりで。】

Gee-san: What story? What's Honeysuckle -- or whatever? And do I know your mother? What's her name?

【どの物語かな。ハニーサックルか何かしらんが、何のことかな？で、わしがあなたの母上を知っておるのですかな？母上のお名前は？】

Narrator: Uh, no. No, you don't know my mother. I mean, she told me lots of stories about someone like you. Never mind. Woo!

【いえいえ。母のことはご存じないです。というか、母はあなたに似た人の話をたくさんしてくれたわけで…。気にしないでください。】

Bar-san: Sweetheart, she is the one who is to ask us questions. Not you.

【御前さん、こちらさんが私たちに質問をなさるんでしょう。御前さんじゃなくてよ。】

Gee-san: That's right, honey. Thank you for reminding me.

【そうであったの。ご指摘いたみいる。】

Bar-san: You're welcome, sweetheart. Now, what is the first question that you want to ask us.

【どういたしまして、御前さん。さあさ、最初の質問をどうぞ。】

Gee-san: Yes. We are more than happy to answer any of your questions.

【そうそう。喜んで質問にお答えしますぞ。】

Narrator: Well, with your words and deeds, you've

already answered my question of who you are. Thank you very much. Well, I've got to go back to where I belong. Thank you for the tea. [To the audience] Well, did you get it, everybody? A very nice couple. Now, let me explore the other couple next door. Hello, I'm sorry to bother you, but could you spare some of your time?

【実は、お二人の言葉と行動で、「あなた方がどんな人か」という質問に、すでにお答えになってます。有り難うございます。そろそろ所定の場所に戻らないといけません。お茶、有り難うございました。(観客に向かって)皆さん、お分かりになりましたか? 素敵なカップルでしたね。それでは、お隣のもう一つのカップルをお訪ねしましょう。お邪魔してすみません。少し時間を頂けますか。】

Barbar: Knock on the door before you come in. Whaddaya you want? Who the heck are you? I've never seen you before. We've got nothing for a stranger like you. Get outta here.

【入る前にノックをせんかい。何の用じゃ。あんたはどこの誰かの。見たことねーな。あんたのような見知らぬ者にあげるような物は何もねー。さー、出てけ。】

Gee-G: Hey, Barbar, take it easy. This young lady wants some of our time. Easy does it. She may be a tree where the money grows, you never know, do ya? Well, honey, you believe in the saying that "the time is money," don't you?

【おい、ばーさんや、落ち着け。このお嬢さんはわたしの時間が欲しいんじゃない。そんなにカッカするな。お嬢さんはもしかして金のなる木かもしれんでな。お嬢さん、「時は金なり」ということわざをご存じかの。】

Narrator: I sure do, yes. Actually, that's one of my guiding principles in my real life.

【ええ、もちろんです。実際、実生活では私の行動規範の一つです。】

Gee-G: Sounds perfect. I'll give you a special discount: a buck a minute, tax free.

【そりゃ、完璧じゃ。お嬢さんには特別割引を差し上げよう。1分1ドルの税込みで如何かの。】

Barbar: Make it 10 bucks, Gee-G. You are too generous.

【そこは10ドルにせんか、爺さん。御前さんは、ほんに氣前が良すぎるわい。】

2-3 事例 その二 (解説&スクリプト)

次に、ポチ登場の1幕についても、ピッツ版を紹介して、原作との違いをみておきたい。さらに、今回のスクリプトでは使えなかったものの、「こんな登場の仕方もある」という一例を加えておく。

ピッツ版のオリジナル・シナリオには、上で述べた理由から、ポチと爺さんの劇的な出会いも、愛情を注いでポチを育てる爺さん&婆さんの姿も一切記載されていない。代わりに、ポチが元気に先を走り、爺さんが息を切らせながら後を追いかけるシーンが「ポチ登場」の場面となっている。

以下は、その登場の場面での、爺さんとポチとのやりとりの一部である。

Pochi: Wan Wan. No, I mean. Bow Wow.

【ワンワン。いや、バウワウやった。】

Gee-san: Hey, Pochi, wait for me. You're running too fast. What makes you run so fast, standing on two legs? Do you take anabolic steroid or something? Oh, there you are.

【お〜い、ポチや。待ってくれ〜。おまえは速く走り過ぎじゃ。なんでそんなに速く走れるのかの。2本足で立って。筋肉増強剤でも打っておるのか。お〜。そこにおったか。】

Pochi: Bow Wow. Koko-Hore-Wan-Wan! (Dig up here!)

【バウワウ。ここ掘れ、ワンワン。】

Gee-san: Pochi, what are you saying? Did you find something that makes you feel excited? Let me just take a little rest here. I'm so tired.

【ポチ、何を言うとするのか。何か面白い物でも見つけたかの〜。ちょっとら休ませてくれ。わしゃ、疲れた。】

Pochi: Bow Wow. [comes closer to Gee-san and taps him on the shoulder] Asoko-Hore-Wan-Wan! (Dig up other there!)

【バウワウ。(爺さんに近づいて、爺さんの肩を叩く) あそこ掘れ、ワンワン。】

Gee-san: Poch, let me tell you something. Dogs usually bit an arm or a leg of their master to get their attention, but you were tapping me on the shoulder. Is this some kind of --

【ポチ、言わせてもらうがの。忠犬はたいがい何かを知らせようとする時は、ご主人様の腕や足に噛みつくもんじゃが、おまえはわしの肩さ叩いちよるの～。これは何か・・・】

Pochi: [starts biting Gee-san's left arm and tries to move him]

【(爺さんの左腕に噛みつき、爺さんを動かそうとする)】

Gee-san: What do you want me to do?

【わしに何をしろと言うのじゃ。】

この後に爺さんが何をするのかは周知の通りであるが、ピッツ版が「裏の畑でポチが鳴く♪」の内容と合致していないことに気づかれたらどうか。ポチ登場の舞台が、裏の畑なら息を切らせてまで爺さんを走らせる必要はないはずである。上で紹介したシーンは、大判小判を掘り起こさせるために、ポチが爺さんを裏山の畑に連れて行こうとするところである。原作からの逸脱であるが、許容範囲であろう。ピッツ版の作者の意見としては、直前のナレータのセリフに、“Now, here's Pochi.”とある限り、華々しく登場するのが相応しく、そのためにも「ポチは走るべきである」とのことである。以下は、そのナレーションの一節である。

Narrator: . . . And one other lesson that this story wants to tell you: treat animals right, particularly dogs. If you treat them right, doggies might bring you a fortune you've never dreamed of. Well, I hope I did not sound too greedy when I said that. Anyway, I want you to meet a dog; without his preternatural power, this story would not have existed in the first place. Now, here's Pochi with Honeysuckle Gee-san.

【・・・そして、この物語が皆さんに伝えたいもう一つの教訓とは、動物、特に犬を大事にしろということ。犬を大切に遇すれば、彼らはあなた方が夢にも見たことのないような財産をもたらしてくれるかもしれ

ません。あらま、こんな事を口にした際の私、強欲に聞こえてなければよろしいのですが。ともあれ、皆さんに一匹の犬をご紹介いたしましょう。彼の超能力がなければ、元々この物語も存在していないわけです。さ～て、ポチの登場です。花咲じいさんと一緒に。】

もう一つの「登場の仕方」についてであるが、以下のように、「ポチ」という名前の由来を「豆知識」としてナレータが紹介しながら、ポチの登場を促すのも面白いかもしれない。例えばこんなナレーションは如何だろうか。(紙面の関係で日本語訳のみ掲載)

ナレータ：おいで皆さん、聞いてくれ。その昔、「花咲じいさん」に登場する犬の名前は、特にこれと決まっていたわけではなかったとか。モモ、ハナ、サクラ。ちなみにこの3つは「犬の名前ランキング2006」の女の子部門のトップ3なんですけど・・・名は何でも良かったようです。時代が明治になりまして、この昔話の唄ができました。その時に「ポチ」と言う名が初めて使われたといわれております。さて、皆さんは、この「ポチ」の語源をご存じですか？「斑な」を意味する英単語といえば、“Spotty”ですね。アクセントの関係で、ネイティブが発音すると最初のSの音、つまり「ス」が聞き取れず、「ポティ」と聞こえたそうであります。そして「ティ」が日本語的に「チ」に変化して、「ポチ」となったというわけです。一つ賢くなりましたね。それでは皆さん、私と一緒に“Spotty”と声に出して頂けますか。3, 2, 1, ポチ！」

掛け声が終わって幕が開けば、裏庭でポチが「ここ掘れ、ワンワン」という展開である。

3-1 ナレータの使い方 その一

ピッツの英語劇で、最も重要な役割を担うのは、常にナレータである。今回の「花咲じいさん」でも表1の数字が示すように、ナレータは台詞の数で主役の爺さんを凌駕している。また、括弧内の数字が示す長文の数からは、ストーリーの展開にナレータが果たす重要な役割が簡単に想像できることであろう。

配 役	登場回数	台 詞 数
ナレータ	21	93 [42]
爺 さん	37	90 [12]
婆 さん	31	55 [4]
爺	20	53 [3]
婆	19	57 [2]
ポ チ	10	— [0]
お 殿 様	6	21 [3]

表1 登場回数と台詞数（センテンス）

注) []内の数字は、16語以上の長文を指す。

ナレータは、劇中の登場人物と観客の両者に向けて言葉を発することができる特別な立場にあるために、ホストのような存在である。さらに、言葉のマジックを駆使して如何様にもストーリーを展開させることができるために、ストーリー・テラーの役をも担うことになる。ナレータを上手く活用できるか否かが、英語演劇による昔話の出来不出来を決定する一大要因であると思われる。以下、ナレータの使い方について若干のコメントをしておきたい。

昔話であれ何であれ、ストーリーの展開には、2つの進め方が考えられる。一つは、登場人物によるモノログとダイアログであり、もう一つはナレータの語りであるナレーションである。前章で取り上げた、ナレータによる2つのカップルへのインタビューは、どちらにも属さない変則的な進め方であるが、もう一つの気の利いた使い方であるかもしれない。

話の筋として語られる必要はあるのだが、舞台での演技は省略してもかまわない部分や、物理的な制約等で演じることが不可能な部分を、ナレータは言葉にして語るわけである。最も演技そのももからは疎遠に見える存在であるが、言語と非言語の両方においてナレータは優れた役者でなければならない。以下、ピッツ版「花咲じいさん」から声と身体の演技力が問われた部分を紹介する。裏山で爺が、大判小判ではなく、ゴミを掘り起こした後、怒り狂ってポチを追いかけるシーンからである。

Narrator: Pochi tried so hard to run away from the greedy old man, hoping to get back to the house where Gee-san and Bar-san were waiting for him.

Unfortunately, however, Pochi got captured by the old man, whose excessive anger toward Pochi transformed him into a murderous madman. The old man hit Pochi so hard so many times with a stick he picked up while chasing him. Pochi died. The greedy old man reported to Gee-san that Pochi died just a while ago after suffering a stroke. Gee-san and Bar-san went out to pick up Pochi's body which was left out on the nearby mountain path. They took it back home and buried Pochi in their backyard.

【ポチは爺さんと婆さんが待つ家に戻ることを願って、貪欲な爺から逃げ切ろうと、それは懸命に走りました。しかし、ポチへの怒りによって殺人鬼と化した爺に、不運にもポチは捕まってしまったのです。爺は、ポチを追いかける際に拾った木切れで、激しく何度もポチの身体を打ち続けました。ポチは死んでしまいました。貪欲な爺は、ポチはつい先ほど脳卒中で死んでしまったと爺さんに伝えたのです。爺さんと婆さんは近くの山道の傍らに置き去りにされたポチの亡骸を拾いに行きました。二人は遺体を持ち帰り、庭に埋めてあげました。】

3-2 ナレータの使い方 その二

次に、「困ったときのナレータ頼み」ではないが、今回のスクリプト作成で、露骨な形でナレータを乱用した例を紹介してこの章を閉じることにする。ポチのお墓に植えた苗木が大きくなった後、その木から臼を作ろうとするシーンである。臼作りのための道具が見あたらず、あちらこちらと庭先を探している爺さんに、隣の婆が声を掛ける。道具を貸してくれんかと話しかける爺さんに、「道具などいらぬ！」と不機嫌な様子は婆さん。ポチを殺した者の世話にはならぬということらしい。では、どうして臼をつくるのかと尋ねる爺さんに次のように答えた。

Bar-san: Just ask the narrator to invent one, honey. She can do anything. It's like "In the beginning was the word," you know.

【ナレータさんに一つ作ってもらえばよろしいのでは。

彼女は何でもできますからな。「初めに言葉ありき」ってやつです。】

Narrator: Well, I usually don't do this kind of irregular narrating, but it looks like I have to, in order to get this story going. OK, here we go. Out of the tree that Gee-san cut down, the couple made a mortar without any cutting tools. Now, they are going to make rice cakes with the mortar where they think the Pochi's spirit dwells.

【えー、たいがいはこの種の変則的なナレーションはせんのですが、話を先に進めるためには、やらんとあかんみたいですね。分かりました。では。お爺さんが切り倒した木から、爺さんと婆さんは、道具なしで臼をこしらえました。二人はこれから、ポチの魂が宿っているこの臼を使って餅つきを始めます。】

4-1 舞台作りの工夫 その一

これまでに述べたことと、これから述べようとする「無理のない舞台作りの方法」も、結局はナレータの使い次第のようである。上で述べた「臼作り」のシナリオも、実際に演じた場合の舞台作りの煩雑さと小道具にかかる経費を考慮した結果、ジョークにして誤魔化すためのものであった。もちろん、臼を作るシーンは全く不必要という認識が前提にあったわけであるが。以下では、ナレータに頼らない部分での、舞台作りの工夫について、ピッツ版「花咲じいさん」から2つ紹介したい。

承知のように、「花咲じいさん」のストーリー中に、大判小判が2度登場する。1度目は土から掘り起こされ、2度目は餅から吹き出ることになっている。通常は、それぞれの場面を「見るまたは聞く」行為を通して、この「美味しい情報」を隣の爺&婆が獲得する。



写真1

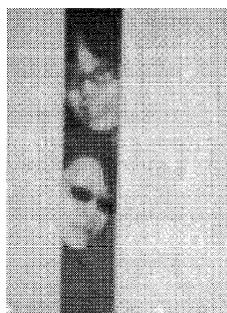


写真2

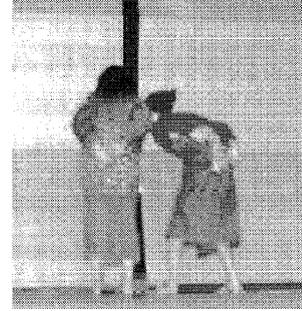


写真3

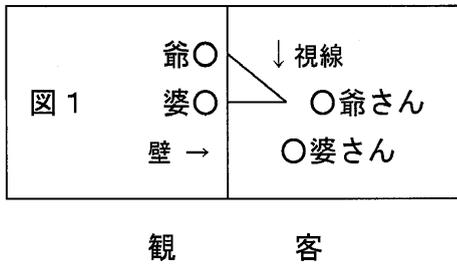
ピッツ版では、各シーンの後に、爺さん&婆さんが大判小判を前にして言葉を交わす一幕を挿入し、その様子を戸の隙間から爺&婆が「見聞きする」シーンを設けた。写真1は、掘り起こした大判小判を前にして話し合う爺さん&婆さんを、背後から鋭く凝視する爺&婆。写真2は爺&婆の像を拡大したものである。

今回の舞台づくりで工夫したところは、写真3のシーンである。これは、写真1の状態を「後ろから見たところ」と観客に想像してもらおうためのシーンである。写真1のシーンの最後に、以下のナレーションが語られ、次に舞台が暗転して写真3のシーンに移行するのである。

Narrator: While the couple were talking about the oval gold coins, they felt someone's eyes sharply fixing on their backs. I'm sure you all know whose eyes I'm talking about here.

【爺さん&婆さんが大判小判について話し合っている間、二人は鋭い視線を背中に感じていました。皆さんにはお分かりですね。誰の視線かは。】

大判小判が餅から吹き出た後のシーンでも、ナレータの台詞からBGMに至るまで全く同じ事を繰り返し、反復効果による「分かりやすさ」を目指した。舞台作りの初期の段階で、図1のような構図を考えたことがあるが、すぐに廃案になった。密に行われるはずの爺&婆の行為が、舞台の半部を使って為されるために、仰々しさが目についてしまう上に、観客の位置次第では、どちらかのカップルがよく見えないという観劇にとっての最悪の事態を避ける必要があったからである。



4-2 舞台作りの工夫 その二

ピッツ版「花咲じいさん」の舞台作りで、一番骨が折れたのは、桜の枯れ木に花を咲かせるシーンであった。背景になる白の布、木になる茶色の布、桜の花になるお花紙、花を咲かせる際に引っ張るための荷造り用P.Pひも、総経費約2千円ほどの装置を作成して、本番に臨んだ。写真4は、一吹きそのよ風が灰を飛ばして花を咲かせた後に、爺さんが試しに咲かせてみせたシーンである。この辺りまでは順調に進んだものの、写真5の満開のシーンまでに、P.Pひもが絡んでしまって、なかなか終点まで引きあがらない状態の花びらがあるなど、裏方の練習不足が露呈した一幕もあった。



写真4

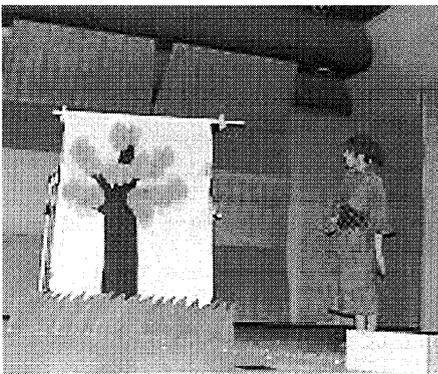


写真5

裏方が数人で両手の指にお花紙を装着し、背景の布に入れた切れ目から手を突き出して「花を咲かせる」という案があったが、合計20本ほどの腕がなければ満開にならないという理由で却下された。写真にある白い布の背後に10人は入れないからであった。P.Pひもの代わりに、天蚕糸のような滑りのよいものを使用していれば、もう少し「見事な開花」で舞台のクライマックスを飾れたかもしれない。

おわりに

本稿では、06年12月の冬季学内公演で英語劇団“The Peach Pits”が用いたオリジナル・スクリプト「花咲じいさん」を題材にして、スクリプト作成と舞台作りの際に参考になるような工夫や情報を提供した。原作からの逸脱こそがオリジナリティを発揮する場であるとして、ジョークをふんだんに取り入れた楽しい舞台作りを示唆した。ナレータは不可能を可能にする言葉のマジシャンである。芝居を生かすも殺すも、如何にナレータを使うかで決まるとも述べた。舞台作りの工夫としては、実例を示すに留まったが、スタッフや関係者の間で色々と知恵を出し合うことが重要になると一言加えておきたい。

最後に、冒頭で述べた「英語パフォーミングアーツ・コース」での使用を目的に、今後も日本昔話の英語版を作成していく予定であるが、別に「英語による漫才」の台本も書き進めている。次回はこの辺のことも触れてみたいと思う。

註

1. 佐生武彦, 橋内幸子, 垣見益子, 「英語劇団The Peach Pitsの活動報告と授業への演劇の導入に関する一考察」『中国学園紀要』第5号(2006年6月), pp59-64.
2. <http://plaza.rakuten.co.jp/yofusvensk/diary/200703210000/>
3. 松畑熙一, 「『吉備学』への助走」, 吉備人出版 pp180-188
4. <http://enkan.fc2web.com/minwa/sonota/07.html>